

イデオロギーとテロル(二)

— 共産主義全体主義独裁制における恐怖と狂気のシンフォニー —

小沼 堅 司

(目次)

一 「知識人の阿片」

林達夫「共産主義の人間」〓抽象的人民への愛と生身の人間の虐殺／ステイファン・ツヴァイク〓「思想の独裁」の恐ろしさ／モラリスト・マルクスのアイロニー／『共産主義黒書』〓共産主義のバランスシート／サルトル・カミュ論争〓革命的ニヒリズムと反抗的人間の倫理／階級的全体主義と人種の全体主義／レーモン・アロン、シモーニュ・ヴェーユ〓「知識人の阿片」としてのマルクス主義／政治的宗教によるロシア正教会と民衆文化の破壊／バートランド・ラッセル〓ボルシェヴィキの宗教的狂信と憎悪の独断論の告発／マルクス・レーニン主義の非情〓「餓死する民を救援するのは甘ったれた感傷主義である」／政治的宗教としての全体主義／ジョージ・オーウェル〓神なき宗教、メシアニズムの恐怖／「プラウダ」(真理)の社説以外に「イスチナ」(真理)はない〓全体主義的救済〓プラトンの誘惑／指導者崇拜〓ナルシズム幻想の共同化／一つの事例〓北朝鮮全体主義に憑かれた人々

(以上二一七号)

二 全体主義の予備的、一般的考察

(一) はじめに——「カチンの虐殺」〓「民族浄化」と「階級浄化」の悲劇

(二) イデオロギーとテロル——ことばの起源と展開

(一) イデオロギー

(2) テロル

(三) ナチズムとコミュニズム

(以上本号)
(以下次号)

(1) 第一次世界大戦と反ブルジョア・ナチズムとコミュニズム

(2) 人種主義(反ユダヤ主義)のレトリック・「自己投影のからくり」

(3) カリスマ共同体

(4) スペクタクル政治・大衆／テアトロクラシー／神話／暴力

(四) H・アレントの全体主義論

(五) トドロフの全体主義

三 左翼全体主義——共産主義

(一) ポリシェヴィキによる権力奪取

(二) 「プロレタリアート独裁」と恐怖政治

(三) スターリニズム全体主義

(四) 毛沢東の大躍進政策と文化大革命の狂気

(五) 北朝鮮全体主義の悲劇

(六) カンボジア・ポルポト政権の虐殺政治

四 共産主義的全体主義の二十世紀

二 全体主義の予備的、一般的考察

(一) はじめに——「カチンの虐殺」＝「民族浄化」と「階級浄化」の悲劇

ヴィクトル・ザスラフスキー(一九七五年にソ連を出国、カナダに帰化)は、ナチス・ドイツとソヴェエト両政

権間の緊密な協力関係の意味を、独ソ不可侵協定に基づいてソ連に分割占領された東部ポーランドでの「カチンの森の虐殺」事件（ポーランド将校の虐殺とその後の数十万人に及ぶポーランド人の迫害）について新資料に基づいて研究するなかで明らかにし、「二十世紀全体主義制度の本質的な、相互に依存しあう特徴」を剔抉した。

その特徴は二つあり、一つは日常支配の道具として大衆恐怖政策を系統的に行使用すること、もう一つは、恐怖政策を導く役割をイデオロギーに与えることである。この全体主義国家の二つの様相が膨大な、想像を絶する犠牲者を生んだ。ザスラフスキーはこの点において、「近代の左翼全体主義と右翼全体主義とのあいだに深い類似性を見出すことができる」という。

「社会衛生学という〈科学的方法〉と〈ブルジョア感染症〉の〈浄化〉によって新しい社会を建設する試みは、二〇世紀の全体主義政権を結びつけている。異分子と有害分子、社会的寄生分子、つまり対抗する社会階級や敵対する人種と定義する者たちから社会を浄化するのだという概念に基づくイデオロギー恐怖政治は、ナチとソヴエト政権の共通分母である。暴力と恐怖支配は、この両政権の核心をなす要素だった。両政権は政治的反対者だけではなく、はじめからその存在自体のゆえに〈客観的敵〉〈人民の敵〉として断罪した社会集団全部を、肉体的に抹殺する目的を追求した。ある集団はその人種の出自のせいで、その他の集団は特定階級に属するせいで抹殺の対象とされた。カチン虐殺は〈階級浄化〉の縮図であり、アウシュヴィッツは〈人種浄化〉の縮図なのである。¹⁾」

ポーランドの法律家ラファエル・レムキンは、ナチスのユダヤ人抹殺を表現するのに「ジェノサイド」という新

語を用いた。現在、国連の定義によれば、ジェノサイドは、民族、国民、人種、宗教的集団、その他の恣意的基準で決められた集団の全部あるいは部分的絶滅を目的とした犯罪行為をさす²⁾。この概念は「民族浄化」、つまりナチスによるユダヤ人抹殺を分析する際に用いられ、一般に流通している概念との類似性を示すのに役立つ³⁾。ナチスのユダヤ人殺戮を民族浄化のジェノサイドと呼ぶとすれば、スターリン主義体制下で行われた大量殺戮を「階級ジェノサイド」と呼ぶことができる⁴⁾。ヴィクトル・ザスラフスキーは、スターリン主義による大量殺戮を「階級浄化」、「階級浄化のジェノサイド」という概念で捉えている。彼のいう「階級浄化」とは、マルクス・レーニン主義を基本的イデオロギーとして採用した全体主義体制（レジーム）によって実行された、一つの社会階級全体の計画的・系統的抹殺である。

このスターリン主義支配下で行われた「階級浄化のジェノサイド」を理解するには、マルクスレーニン主義は、社会は最終的完成の段階に向かって絶えず進歩するというイデオロギーに依拠していることを忘れてはならない。このイデオロギーによれば、根本的社会変革をめざして、その実現のために人類史上未曾有の暴力と大量テロの使用を正当化することができる。この変革と完成は、社会と生活のあらゆる領域、世界観、思考形態・内容、行動様式すべてに及ぶとされる。イデオロギーが純粹であればあるほど、その実現のためのテロルは正当化される。このイデオロギーでは、変革は階級闘争として行われる。歴史の法廷で有罪を宣告された搾取階級（ブルジョアジー）は消滅させなければならない。歴史において選ばれた階級であるプロレタリアートは、社会・経済的にも政治的、道徳的にも敵であると同時に「悪」であるブルジョア階級および地主・富農を絶滅する責任がある。前者は「優等」であるのに対し、劣等階級の後者は社会の進歩の障害であり、歴史発展の過程で消滅を運命づけられている。各人は個人としてではなく階級の一員として規定され、歴史の裁きを受けなければならない。

このような告発は、階級闘争のイデオロギーの公理に準拠するものであった。すなわち「敵階級」か、疑わしい社会集団に属するかである。具体的には、分類は次の三つの特徴に基づいていた。すなわち社会的出自、現在の所属階級、政治的過去である。このイデオロギーの公理による特定範疇の人々の殺戮・弾圧は、すでに一九一八年にまでさかのぼることができる。それは、レーニン政府がチューカー（秘密警察）に対して出した命令に集約されている。

「われわれは個々人に戦いを挑んでいるのではない。階級としてのブルジョワジーを破壊しつつあるのだ。調査をつうじてわれわれは、被告がソヴィエト権力に言辞行動で反対した証拠を採すまでもない。投げかけられるべき第一の質問は、被告がどの階級に属しているか、である。被告の出自は？ 被告の教育と職業は？ 被告の運命を左右するのはこれらの質問にたいする答えである。そこに赤色テロルの意義と本質がある。⁵⁾」

だが、スターリン主義による大量殺戮では「階級浄化」に加えて、潜在的な裏切りの危険を疑われた様々な民族集団のまるごとの強制移住が計画され実行された。これはソ連保安機関では「強制浄化」と呼ばれた。それゆえスターリン主義では、「階級浄化」と「民族浄化」はしばしば密接な関係があったことに注意すべきである。ザスラフスキーは、ソ連内務人民委員部（NKVD）によって一九四〇年四月と五月にポーランド軍将校が処刑され、数十万人が弾圧された「カチンの虐殺」はポーランドのソ連占領地域で実行された「階級浄化」の過程の一部として認識すると、事実をはじめて正しく理解できるとい⁶⁾う。

カチン虐殺は長い間隠蔽され、ナチス・ドイツの仕業とされた。虐殺の証拠書類を破棄して、歴史改竄を完全な

ものにしよとしたソ連指導部の努力は成功した。戦後長い間、西欧の政治家と歴史研究者は、ソ連の公式見解に甘んじてきたからである。一九七二年、イギリス政府は、ソ連の圧力を受けてポーランド移民によるカチン犠牲者追悼記念碑建設許可願いを却下した。私有地に追悼碑が建設されると、政府関係者や軍関係者に除幕式への参加を禁止した。一九七六年、ソ連の国家保安省（KGB）は最も権威ある公式見解を作成した。それは、生涯をかけて左右の全体主義と闘った二十世紀最大の政治的作家ジョージ・オーウェルのいう「事実の捏造」と「客観的な真実の存在そのものの否定」であった。このような捏造と否定によって同時に、ナチス・ドイツを弾劾し、アメリカ議会委員、イギリス放送協会（BBC）ラジオ、新聞「デイリー・テレグラフ」、カトリック司祭など資料によって真実を追究する人たちを、「反ソ宣伝キャンペーン」を行っているとは非難した。ソ連は、歴史の真実を立証するあらゆる努力と可能性を妨げるために手段を選ばなかった。犯罪者が無実のものを告発し、事実の隠蔽・改竄・捏造を行うものが真実を主張し、「政治的大量殺人」（politicide）を行ったものが国際関係の規範と人道精神を訴えるという、恐るべき欺瞞が長らく通用してきたのである。ソ連の思想的同伴者たちは、ソ連の責任を否定して歴史の偽造に協力した。良心的な者はソ連とポーランドの見解を並べて、中立を装った⁷。

このようなソ連の事実の抹殺と捏造は、歴史の真実にたいする全体主義の態度を示している。ジョージ・オーウェルは「文学の禁圧」（“Prevention of Literature”）において深い洞察力をもって次のように把握した——

「全体主義国家が行っている組織的な嘘は、時々主張されているような軍事上のごまかしと同性質の一次的な方便ではない。それは全体主義とは切り離せないものであり、強制収容所や秘密警察の必要がなくなってもまだ続けられるだろう。知的な共産主義者の間には、ロシア政府がいまは虚偽の宣伝やでっち上げ裁判をやむをえず

行っているけれども、裏では真実を記録しているのであって、いずれそれを発表するだろうという風説がひそかに流れている。断言してもいいがそんなことはありえない。なぜなら、そうした行動に含まれる精神的態度は、過去を変えることはできず、正確な歴史知識は自明の価値を持つと信じる自由主義的な歴史家のそれだからである。全体主義の観点からすれば、歴史は学ばれるものというよりは創られるものである。(中略)全体主義は事実、過去の継続的な変更と、結局はおそらく客観的現実の存在そのものの否定とを要求するだろう。⁽⁸⁾

オーウェルの予見的告発の正しさは、二十世紀末のソ連・東欧諸国の崩壊によって証明された。

(二) イデオロギーとテロル——ことばの起源と展開

(一) イデオロギー

しばしばイデオロギーは、先入見や利害の絡んだ偏見によって真実を歪曲したり、覆い隠したりするものとみなされる。自分自身や属する党派の見解が正しく、相手の意見は間違っていると断罪する際に、「君の意見はたんなるイデオロギーにすぎない」という。つまり、イデオロギーは真実の認識を妨げるだけでなく、自己の見解を正当化するのに用いられる。イデオロギーがこのような非難語として用いられたのは、ナポレオンが自由主義的知識人を「イデオログ」と呼んで、現実外れの幻想家を蔑んだときであった。「イデーの学(イデオロジ)」を探求したフランス啓蒙哲学者たちは、人間の教育形成の第一条件は人間の精神的・政治的自由であると説いたことに対して第一執政官ボナパルトから、また理性宗教を説いたことに対して「社会の第一基礎」であるキリスト教から、国家や道徳や宗教の真の本性を見過っており、現実をしない「空理空論家」であると非難された。

イデオロギーは、近代において伝統的な世界解釈の教条主義に対する批判から生まれたものである。社会統合の基礎となってきた過去の神話や伝統的宗教は静態的で、あまり懐疑や不信の対象となることも、互いに競合し合うこともなかった。それに対して、イデオロギーは近代の市民革命や産業革命に伴う政治的、社会的、思想的変動に随伴して、特定の社会集団や政治集団が自らの見解や利害や権力の正しさを主張する武器として用いられた。イデオロギーは、近代啓蒙主義が科学的合理主義を装いつつ、自らの主張を正当化するための言説であった。それは偏見や無知に対して理性に訴えた。

イデオロギーという用語がはじめて作られたのは、フランス革命の余波のなかであった。革命議会が啓蒙主義の理念を普及させるために設立したフランス学士院の指導者アントワヌ・デステュト・ド・トラシは、あらゆる学問の基礎となる観念の新しい学問、すなわち観念¹¹学 (ideologie) を提唱した。それは、宗教的あるいは形而上学的偏見から自由になり、正しくかつ幸福な社会の基礎となる観念の起源に関する合理的な研究であった。それは現代におけるイデオロギーが帯びるイメージとは異なって、科学、つまり観念の形成と発展を支配する法則に関する合理的研究の試みであった。⁹⁾

啓蒙主義時代の観念学者たちがめざしたことは、社会的・政治的諸制度を形而上学的錯覚や宗教的迷信から切りはなして、合理性を基盤に根底から再構築することであった。そのためには人間を人間たらしめているもの、つまり精神の本質の探究が必要であった。人間の本性に関する最も正確な知識に基づいてこそ社会制度は合理的に変革できるのであり、正義や幸福の実現にしても人間の本性に関する不変の法則と社会制度とを適合させることよって可能になると考えられた。オルバック、コンディヤック、エルベシウス、ジョウゼフ・プリーストリーら啓蒙主義時代の観念学者たちは、感覚的経験から人間の思考へいたる精神の進歩の筋道を明らかにし、それによってかつ

て諸学の女王であつた神学を追放して新しい学問を作り上げようとした。デステュト・ド・トラシーの主張によれば、必要なのは「思考の科学におけるニュートンの存在」であつた。¹⁰ 観念学の提唱者ド・トラシーは、フランスの革命的ブルジョアジーの代弁者として闘つたが、恐怖政治時代に投獄された。彼の観念学は、恐怖政治の非合理的蛮行のなかで構想されたわけである。かれは学士院の有力メンバーとしてフランスの社会改造計画を理論面で支え、とりわけ行政官養成をめざす「中央学院」のために、国民教育の構想を練つた。¹¹

だが、イデオロギーが独特の政治用語となつたのは、ナポレオンが、彼を批判する第一帝政期の自由主義的貴族や知識人を、空理空論を弄する輩と罵倒して「イデオログ」というレッテルを貼つたときである。観念体系一般をさす言葉であつたイデオロギーは、それ以降、敵の言説を空虚（非現実的）なものであるとして攻撃する際に用いられるようになった。それは、空虚な知識人の空虚な言説であるだけでなく、普遍性と合理性を欠き、現実から乖離する虚偽の言説であるとした。

ここで、マルクスレーニン主義イデオロギーが恐怖のユートピア思想であることを理解するために、マンハイムのイデオロギー論を瞥見しておこう。¹² マンハイムは「イデオロギー」と「ユートピア」をともに「存在を超越した表象」であると規定する。ここで超越的というのは、「存在」つまり「現実的 (wirklich)」なものとして規定することのできる生活秩序」に属さないという意味である。存在を超越した表象であるが、存在によって規定されている。マンハイムの知識社会学においては、あらゆる認識は存在、つまり認識主体が置かれた歴史的社会的状况によつて規定されている。いわゆる「存在非拘束性」(Seinsgebundenheit) の理論である。この存在超越的表象のうち、「そこに表象されている内容が事実上決して実現されることがない」表象をイデオロギーと名付ける。これに對してユートピアは、現実を超越した表象でありながら、同時にその時その時の現存の存在秩序を破壊するような

ものである。マンハイムによれば、ユートピアは「現実を変形する」力であるのに対し、イデオロギーは「現実を覆い隠すもの」である。

マンハイムは、社会的存在の歴史的形態としての現実に対する「多かれ少なかれ意識的になされる偽装」とそれに応じた言明の形式をイデオロギー論が取り扱うべき対象だという。それゆえ、「さまざまな人間の党派、とくに政治的党派が多かれ少なかれ意識的に行う欺瞞や隠蔽を暴くこと」がイデオロギー論の課題であるとされる。

イデオロギー論が暴露しなければならないのは、このイデオロギーの虚偽意識、つまり現実の隠蔽や歪曲だけではない。もう一つ、自らの集団や党派の考えこそ正しいと主張するイデオロギーの正当化機能がある。政治的イデオロギーは、国家や経済・社会生活に関して、現在の政策を正当化するだけでなく、思想的な未来設計でもある。そこには意志や信念が働いており、党派成員を結集させる力と行動をうながす機動力を含んでいる。この衝撃力こそイデオロギーの力なのである。

さらに重要なことは、政治的イデオロギーは別のイデオロギーを支持する者のなかに〈敵〉を見出すことである。最悪の敵と目されるのは、異なる党派、異教徒、異なるイデオロギーであるよりも、むしろ裏切り者、背教者、異端者である。かつて同じ党派に所属し、同じイデオロギーを信奉していたがゆえに、それだけ憎しみが大きい。政治イデオロギーの恐ろしさは、憎悪を増殖させて「奴は敵だ、敵は殺せ」（埴谷雄高『幻視のなかの政治』）という行動を起動させることにある。ある研究者は、この憎悪の自己増殖メカニズムについて次のように書いている。

「あるイデオロギーをもつ制度は、歴史の過程をつうじて、このことを、ありあまるほど証明してきた。裏切り者に対するその反応を見てもわかるように、味方の陣営から出た敵こそ、その制度の生存を脅かす主要な敵と

見なされる。内部の敵は、その制度の内的結束と統一をみだす。彼はその制度にとって破壊の酵母である。彼は、重大な問題についての裏切者であり、その問題を克服しようとして彼が用いる武器は、イデオロギー上の反対者の武器よりも、もっと危険である。なぜなら彼は、自分が見捨てたイデオロギーの弱点や欠陥を知悉しているからである。おそらく異端者や背教者に対する迫害の苛酷さについては、さらに多くの理由があげられるだろう。究極的には、それは、自分だけが真理を持つという、イデオロギーの確信に帰着する。唯一の真なる教説に与しながら、それから背いていく者には、地獄の呪いがかけられる。¹³⁾

バリオンが婉曲的に「あるイデオロギーをもつ制度」というのは共産主義的全体主義体制である。そこではイデオロギーは文字通り猛威を振るう。すでに本稿第一章で分析したように、共産主義イデオロギーに基づく行動は信仰現象である。ここではあらゆる信仰に共通する特徴、すなわち「信仰される内容」と、私は確信しているという「信仰態度」との統一がある。信仰内容の絶対的正しさは、命を懸けてそれを守るといふ信仰の主観的情熱に支えられている。たとえその希望が幻想であっても虚像であっても構わない。幻想的希望ではあっても、待ち望んでいる事態は必ず実現されるという信仰的要素によって支えられている限り、生の新しい可能性を切り開く現実的要素なのである。¹⁴⁾

マルクスは、感覚的確信から絶対精神にまで至る精神の自己展開を体系化したヘーゲルの観念論的倒錯を批判して、誤った観念の起源は過つた社会的現実にあると主張した。ヘーゲルの観念論体系では、すべての存在するものうちにイデーが働いており、イデーのうちにこそ現実が認識される。マルクスにとっては、このようなイデーはたんに純粹な思惟による構成体であり、現実そのものではない。それは人間の意識における現実の反映にすぎず、

現実を規定する力をもたない空虚なイデオロギーである。

若き日マルクスは、「ヘーゲル法哲学批判序説」や「ユダヤ人問題に寄せて」などの論考において、人間は神の計画に従って存在するのではない、「人間が宗教を作るのであって、宗教が人間を作るのではない」と述べた。民衆がもつ幻想は、そのような幻想を必要とする現実に根がある、それゆえ、「民衆の幻想的な幸福である宗教」を揚棄することは、「民衆の現実的な幸福」を要求することである。宗教は、宗教を必要とする現実のなかで生きる「民衆の阿片」である。後にマルクスは『ドイツ・イデオロギー』で、唯物史観の公式を「観念、表象、意識などの生産は、最初は直接に人間の物質的活動と物質的交通という現実生活の言語に編みこまれている。人間の表象作用、思考、精神的交通は、人間の物質的行為の直接的な流出物である」と定式化した。

マルクスは、もろもろの形態の観念は一定の歴史の発展段階における社会の階級的利害の反映であると定義した。道徳や宗教に関する観念、個人心理や社会心理、諸個人の行動作法（コード）は、政治制度と法制度と同様、生産力と生産関係の統一としての生産様式（下部構造）によって規定される上部構造であるとされた。突き詰めれば、それらは階級的利益を反映するイデオロギーである。マルクスによれば、イデオロギーは階級利益を隠蔽し、正当化する。つまり、社会的・経済的諸関係の矛盾を隠蔽し、不均等な分配を正当化するがゆえに虚偽意識である。それはいずれ、ブルジョア社会における階級矛盾が激化し、虐げられたプロレタリアートが自らの運命を正しく認識し、最終的に革命に勝利したときに暴かれることになることとされた。

だが二十世紀の革命運動と実現された社会主義体制では、イデオロギーは歴史を動かす力を持ち、現実の社会を建設し未来を切り開く原動力であるとされた。正統派マルクスレーニン主義では、歴史の客観的法則を把握し、実現されるべき社会の完全な見取り図を描くことができる科学であり、「なるべき人間」と「なすべき行動」の指

針を示すことができる道徳であるとされる。この種のマルクス主義のイデオロギーは科学的なものというレッテルが張られ、科学こそ進歩をもたらすとされたのである。

レーニンは、社会的現実を隠蔽するイデオロギーの虚偽性を否定した。『何をなすべきか』で彼は、問題は、先鋭化する階級闘争のなかにあつてブルジョア階級の利益を守ろうとするイデオロギーとプロレタリアートの利益を実現する社会主義のイデオロギーのどちらが正しいか、どちらが勝利するかであると述べた。イデオロギーは否定的意味を失つたのである。だが、レーニンによれば、この社会主義のイデオロギーは、労働者階級の意識と同一ではない。労働者階級がもつばら労働組合のレベルにとどまるならば、彼らの意識が社会主義へ向かうことはない。「労働者階級の自発的な運動は労働組合主義であり、労働組合主義の意味するところはイデオロギーにおいて労働者がブルジョアに隷属することだからである。」従つて社会主義のイデオロギーは、職業革命家の一団によつて「外部から注入」されなければならない。こうして、前衛党によるプロレタリアートの指導の必要性が強調されることになった。その結果、レーニンのイデオロギー概念は、クーデタによつて権力を奪取したポリシェヴィキが「プロレタリアートによる独裁」に代わつて、「プロレタリアートに対する独裁」を強行することを正当化した。

後で詳しく検討することになるが、史的唯物論の客観的な法則に基づく主張された十九世紀のイデオロギー研究は、二十世紀に入り、権力と「真理」を独占する単一政党の支配体制を正当化するものとして、猛威を振るうことになった。ヨーロッパ、特にフランスの知識人・運動家を中心になつて執筆した『共産主義黒書』が明らかにしたように、ロシア革命からカンボジアのポル・ポト支配まで、死者累計一億人を超える共産主義支配の犠牲を目の当たりにして、西側の良心的な民主主義者は、この悲劇的事態を説明する用語としてマルクス主義のイデオロギーの政治的、道徳的責任を追及した。皮肉にも、マルクスとその追従者が普及させたイデオロギーという用語は、マ

(2) テロル

フランソワ・フユレは『フランス革命を考える』において、現在世界的に進行しているフランス革命の脱神話化の中心的論点に関連する問題を提起している。十九世紀末のフランスの社会主義者は、人類解放の単線的見方に基づいて、民主主義のための戦いと社会主義のための戦いとを、フランス革命に起源をもつ平等というものに内在する力学の二つの継起的形態として結びつけた。この単線の歴史観によれば、この歴史の第一段階は一七八九年の価値が胚胎され普及されることであった。第二段階では、社会主義革命によってこの一七八九年の約束が履行されるはずであった。たとえば、ジョレスの革命史は、この「二重引き金つき装置」によって支えられていたという。

ロシア革命によって、フランス革命は神話化された。それは、一九一七年一〇月の母親となった。ロシア・ボルシェヴィキはロシア革命の以前にも以後にもこの血筋を意識することをやめなかった。その跳ね返りとして、フランス革命の歴史家たちは、自分の一九一七年に対する感情とか判断を過去にも投影し、第二の革命を予告するものと見なされるものを、第一の革命のなかで特権的な地位にまで高める方向に傾いた。それ以来、二つの革命の単線的連続という見方のなかで、共和主義と社会主義は絡まり合い、互いに汚染しあう。ボルシェヴィキはジャコバン派を先祖とし、ジャコバン派は共産主義の予想図をもつこととなった。¹⁵⁾

二十世紀後半、ボルシェヴィキの革命神話と革命後の社会との矛盾が明らかになるにつれて、起源としてのフランス革命の神話も暴かれることになる。「この時期には、ソヴィエト全体主義、さらに敷衍して言えばマルクス主義を標榜するいっさいの権力に対する批判が左翼の考察の中心論題になった。」¹⁶⁾この種の批判はこれまで、もっぱ

ら右翼の独断場であったが、左翼は自分たちの信仰体系をおびやかす事実と正面きつて向き合わなければならなかった。それまで左翼は、歴史の悲劇を問題にするより、確信の鐘楼をあちこち繕うことで切り抜けようとしてきたが、二十世紀共産主義の実験がつくりだした災厄について自分自身の価値という視点から考察せざるをえなかった。戦後フランスの文化界を支配してきた左翼の教養は、「大革命の約束のなかに歴史がまるごと存在する」と信じてきたが、みずからの解釈、希望、合理化を批判する方向に導かれることとなった。

その一つは、ジャコバンの伝統にボルシェヴィキのテロル政治が根を下ろしてきたことが示されたことである。起爆剤はソルジェニーツインの『収容所群島』である。ソルジェニーツインの作品は、ソヴィエトの経験を参照する際の歴史的な原点になった。彼の作品は、革命計画の最深部における強制収容所の問題を提起した。その時、ロシアの例が、ブーメランのように、そのフランスの起源に打撃を加えに戻ってくるのは避けがたいことである。この問題について、フュレは次のように説明している。

「一九二〇年にマチエは、ボルシェヴィキの暴力をフランスの先例によって肯定・弁護していた。今日では、強制収容所が企図における同一性を媒介として、恐怖政治の再考をうながしている。半世紀前には、『状況』を口実にして、すなわち革命の本性からは外的で、異質な現象を口実にして、系統的な革命の罪障消滅が行われていた。ところがいまでは、肉体と精神に対するきめ細かい束縛制度として、本質を共有する二つの革命の断罪が行われている。」¹⁷

ステファヌ・クルトワは、ボルシェヴィキの「テロルの真の原動力」は「レーニン主義のイデオロギー」と、

「現実と完全にずれた教義を適用しようというユートピア的な意志」とにあった、と分析している。ここでいうレーニン主義のイデオロギーとは、(一)階級闘争、歴史の助産婦としての暴力、歴史の意味を担う階級としてのプロレタリアートといったマルクス主義の初歩的概念、(二)労働組合主義による自然発生的意識では社会主義意識は形成できないという、『何をなすべきか』(一九〇二年)で展開した社会主義意識の「外部注入論」と、軍隊的規律をもつ職業革命家からなる革命政党という構想、(三)「帝国主義戦争の内戦への転化」による革命的祖国敗北論と世界ボルシェヴィキ革命の神話、からなる。レーニンは、ドイツの「一〇月」が挫折し、ヨーロッパ・世界革命に関するレーニン主義理論が破綻した結果、ボルシェヴィキのみが無秩序の極にある後進ロシアを相手に取り残される事態となった。かれは、ロシアは社会主義への道に入る用意が整っており、すみやかな成果を挙げるだろうというユートピア的意志を実行するために、絶対的権力を確保したいと望んだのである。そのためにテロルが日程にのぼったのである。テロルに訴えることにより、権力を保持し、理論のイメージにあわせて社会を作り変えることが可能になるし、生存そのものによって日々理論の空虚さを非難してやまない人々に沈黙を押し付けることができた。そして、「権力の座についたユートピアは殺害を生み出すユートピアとなった」のである。クルトワは次のように述べている。

「レーニンが樹立した独裁体制はすぐさまテロリスト的で血なまぐさいものであることが明らかとなった。そのとき革命的暴力は、もはや状況対応的な暴力、数か月前に消滅したツァーリズム勢力に対する防衛反応の様相を示すことをやめ、能動的な暴力となった。この暴力こそが粗暴で残忍な古くからのロシア文化を目覚めさせ、社会革命の潜在的な暴力性をかきたてたのである。赤色恐怖政治は〈公式には〉一九一八年九月二日に開始され

たことになっているが、じつは〈テロルに先立つテロル〉がすでに存在していた。一九一七年十一月以降、レーニンは計画的にテロルを組織していたのだ。しかも、他の諸政党や社会の諸構成要素から、公然たる反対の意志が全然表明されていなかったにもかかわらず、である。一九一八年一月四日にレーニンは、ロシア史上初めて普通選挙で選ばれた立憲議会を解散させ、街頭で抗議した議会のメンバーに向かって発砲させたのであった。¹⁸

ロシア革命の勃発、とりわけボルシェヴィキによる権力の獲得は、真の社会主義的教義と真の「歴史の意味」を解説するレーニンのイデオロギーが不可謬であることの異論の余地のない確証であると思われる。一九一七年の後、彼の政策と理論は〈福音書〉の言葉と同じとなった。イデオロギーはドグマに、絶対的・普遍的真理になった。この神聖化の直接的な帰結こそ、共産主義のテロル全体主義であった。単一政党制を命令したのも、イデオロギーと政治の絶対的真理への格上げだったし、テロルを正当化したのもこの格上げだった。また、個人・社会生活のあらゆる側面への監視、侵入を権力に強いたのもこの格上げだった。

階級意識の外部注入論や職業革命家集団による権力奪取、数的にはきわめて弱体であったロシア・プロレタリアートといった現実にもかかわらず、レーニンはプロレタリアートの代表であると宣言することによって自分のイデオロギーの正しさを確証しようとした。プロレタリアという言語象徴の操作・利用は「レーニン主義の欺瞞」の一つである。「昨日イリツチは階級としてのプロレタリアートは（ロシアには）存在しないと断言した。存在しない階級の名において独裁を行うことに賛辞を述べさせてください！」（労働者出身のボルシェヴィキ指導者、アレクサンドル・シュリヤーニコフ）言葉と現実のこのような乖離を可能にする言語の抽象化こそ、テロルを生み出した要因である。それはヨーロッパと中国からキューバ、北朝鮮、ポル・ポトにいたる第三世界のあらゆる共産主義

レジームに見られる。社会も人間も具体的な厚みを失い、共産主義の歴史的・社会的な組み立て玩具のパーツでしかなくなるのである。テロルは、生身の人間ではなく「ブルジョア」「人民の敵」を殺すのである。歴史の恩寵のために。

絶対的・普遍的真理に格上げされたイデオロギー（ドグマ）によって基礎づけられた絶対的・恣意的な権力行使を、ボルシェヴィキはマルクスにならって「プロレタリアートの独裁」と名づけた。カール・カウツキーはいち早く（一九一八年夏）、この独裁の目標が対立する意見を論駁することではなく、その表明を暴力的に禁圧することであり、ひいてはそのような意見の持ち主を抹殺することであると批判した。レーニンも直ちに、独裁はいかなる法によっても縛られない権力であり、プロレタリアートの独裁は、人口の圧倒的多数を占める被搾取者・勤労者の利益のためにブルジョアジーを粉砕することを目的としている暴力であって、「プロレタリア民主主義」の実現にほかならないと弁証した¹⁹。

だが内戦においてテロルの真の姿が現れた。白軍に対する赤軍の内戦には、もうひとつの戦争、ずっと規模が大きく、ずっと意味深い戦争が隠されていた。それは労働者世界の重要な部分と農民の大きな部分に対する赤軍の戦争であった。労働者と農民は、一九一八年夏以降、ボルシェヴィキ支配に耐えられなくなりつつあった。スターリン治下になると、この戦争は党・国家を社会総体と対決させるであろう。公開された公文書に基づく近年の研究によれば、一九一八年から二十一年のこの「汚い戦争」（ニコラ・ヴェルト）こそ、ソヴェト体制の「真の母胎」であった。ボルシェヴィキと同盟した社会革命党左派で、一九一八年五月まで司法人民委員を務めたイサーク・シユテインベルクは、ボルシェヴィキ権力を「首尾一貫した国家テロルの制度」と語った²⁰。

マルクス主義のテロリズムに対する態度は、マルクス主義国家論の矛盾（国家は最終的には消滅していくが、そ

の過程においては強化されるという矛盾)と対応する。すなわち、理性的で人間的であろうとすればするほど、その行動においてテロルを用いるようになるという矛盾である。一〇月革命直後、テロルは、歴史上はじめて、そして大きな規模において意識的に組織された。ボルシェヴィキは、革命を防衛する道具であるとともに人間の意識を改造する手段として、テロルの組織を手がけた。レーニンは、革命的テロルを実践し理論化した。社会主義が勝利するためには冷酷さが不可欠であり、新しい人間性の勝利のためには邪魔な人間を抹殺しなければならず、未来の人民の自由のためには生身の人民の生贄が必要である。一九一七年十一月二十一日、レーニンは、「われわれは、労働者の利益の名において強制を組織しなければならない」と言明した。さらに、一九一九年の強制収容所(グラウグ)創設の法令発布において、それはヴェ・チエカ(全口反革命怠業取締非常委員会)の「不可欠な厳しい冷酷さ」となると強調した。レーニンは真の恐怖政治を求めつつ、「われわれにとって(フランス革命における)引用者注)フーキエリタンヴィルのような人物こそ必要だ」と述べた。「ロシア人は善良すぎる。革命の恐怖政治を精神的に打ち立てることができない。」宣言は次の言葉で締めくくられている、「良き共産主義者は、同時にまた秘密警察の優秀な人材である。」⁴¹⁾

レーニンが求めたフランス革命の「フーキエリタンヴィルのような人物」とそのテロル政治はどのようなものであったか。少し詳しく見ていこう。

革命と不可分の暴力としてのテロル(恐怖政治)は、フランス革命に始まる。最もよく知られている革命的暴力の主要形態は、国民公会(共和政一七九二年九月―一七九五年一〇月)の革命裁判所と監視(密告)委員会、派遣委員会を柱とするテロルであった。この暴力は、王党派や貴族階級、宣誓拒否聖職者など祖国(共和国)の敵を打

倒し、排除するだけでは満足しなかった。敵を殲滅するだけでは不十分で、共和政の徳をもった市民を作ろうとした。ロベスピエールは、「テロルなき徳は無力であり、徳なきテロルは有害である」という有名なテーゼで、徳の共和国を支える新しい人間（人民）を創出しようとした。そのためには「敵」を罰するだけでは十分ではない。「祖国の敵たちを罰するには、彼らの本性を明らかにしさえすれば十分である。しかし、問題は彼らを罰することではなく、彼らを絶滅することなのだ。」革命は人民の敵を絶滅するに加えて、徳のテロルによって新しい人間を作り出さなければならない。自由な市民の共和国が今なお実現しないのは、人間が過去の歴史によって墮落させられているからなのだ。こうして抽象的、理念的な「人民」の自由のために、生身の人民の自由を奪い、さらに反革命として殺戮していった。

ところで、テロリズムという言葉の語源はフランス語にある。ローラン・デスポによれば、この語はフランス革命において作られた言葉であり、革命において生じた新たな事態を形容するための言葉であった。それ以前には *terroriser*（恐れさせる、恐怖政治を敷く）という語は見あたらず、*terrorisme* や *terroriste* も同じく存在しない。²²

テロル（恐怖政治）はフランス革命の一つの統治システムであった。一七九二年の「八月一〇日の革命」（共和制への移行）と「九月虐殺」、さらに一年に及ぶ内外の脅威（「祖国の危機」と「革命の危機」）を経て、一七九三年の「六月二日の革命」（ジャコバン独裁への移行）後、革命裁判所（一七九三年三月）が設置され、公安・保安委員会が設立され、地方と前線に国民公会議員が派遣されて（「派遣議員」制度）、反革命容疑者法（一七九三年九月）が制定され、恐怖政治が加速された。大恐怖政治が頂点に達したのは裁判以前のあらゆる予審を廃止したプレリアルの法令（一七九四年六月）であった。その後、ロベスピエール、サン＝ジュストとその徒党が失脚して終わる。（末尾の資料1「革命の危機と祖国の危機」、資料2「テロル（恐怖政治）」、資料3「恐怖政治の深化」参照）

以下より詳しくみておこう。

恐怖政治の強化と革命政府の成立とは表裏一体の関係にある。テロルは国民公会からジロンド派を追放したあとに苛烈を極めるようになった。革命政府はジロンド派の追放（六月二日の革命）を起点として整備されていったが、主要なテロル装置はすでに一七九三年二月から五月末に、国民公会が例外措置を可決した時期に作られた。

国民公会での国王裁判が終わったばかりのころ、モンターニュ派（山岳党）は新たなテロル機関の設置を考えていた。食糧危機でパリの人民は商店を略奪していた。国境では外国軍の脅威に晒されていた。群衆は議会を取り巻き、「裏切り者」の懲罰を要求していた。

国民公会は、厳しい戦況に対処するために共和国軍の強化を図り、二月二四日に独身者を対象に籤引きによる三〇万人の徴兵を決定した。国内では二月から三月にかけて、ロワール川以南地域（ヴァンデ地方）で大規模な農民反乱が起こった。農民と織布工の集団が白色の帽章（十字架と王家の象徴）をつけて「カトリック王党軍」を形成し、共和派の拠点都市を攻撃した。この自然発生的な反乱に対して、国民公会は「貴族と司祭の陰謀」による「反革命」として、逮捕時に武器を持ち白色の帽子を身につけていた者はすべて二十四時間以内に処刑すると決定した。（一七九三年三月一九日の法令）。

革命の危機と祖国の危機のなかで、ジャン・ボン・サン・タンドレは国民公会に対し、「公共の安寧をさまたげる者たち」を裁く革命裁判所の設置を要求した。タンドレの動議は、ジロンド派議員の激しい反対を退けて採択された。この恐ろしい革命裁判所の設立者として非難され、のちにこの裁判所の犠牲になったダントンは演壇で熱弁をふるい、前年の「九月虐殺」のように民衆が見境のない殺戮を繰り返すという悲劇を避けるために、代わってわれわれが恐るべきものにならねばならないと述べた。「恐怖政治のこの新しい機械を生んだ母」は暴動・飢餓・恐

怖であり、その父は「九月二日の虐殺者たち」であった。⁽²³⁾

三月一〇日、「革命裁判所」(当初「特別刑事裁判所」と呼ばれた)が創設された。マラーはこの措置の意味を次のように表明した——「自由が確立されなければならないのは暴力によってであり、国王たちの専制を粉砕するために自由の専制を一時的に組織すべきときが来た。⁽²⁴⁾」

公会の選挙で革命裁判所の判事にモンタネラ三名、予備判事三名、主任訴追官一名、次席訴追官はフーキエッタ、エハ、正義が勝利を収め、「人民のすべての敵」を絶滅させ、人民が「共和主義の美德」を身につけたとき裁判所も県も銃もいらなくなると述べた。美德政治のためのテロル機構という論理である。⁽²⁵⁾

この陣容のなかで裁判所に通じていたのはフーキエッタとヴィルだけであった。彼はみなを裁判所に案内し、最高裁の法廷が置かれていた大会議場を革命法廷とした。そこには、革命裁判所は他のあらゆる裁判権に対して最優位に立ち、上告できない最終法廷になるという論理がある。この次席訴追官の権力は絶大であった。自らの権限によつても、役所あるいは一般市民の告発によつても犯罪行為を訴追できた。国民公会はすべてのフランス人の生殺与奪の権限を与えるべく、様々な法的根拠を提出した——すべての亡命者および一七九二年五月九日以来引き続き居住していたことを証明できない不在者は死罪、三月二十三日以前に宣誓を済ませていないすべての神父は死罪、国民公会の解体を意図した文書、あるいは殺人・略奪を教唆する文書を作成ないし印刷したと信ぜられる者は死罪等々である。

一七九三年三月二十一日には、革命裁判所の設立に続いて監視委員会が創設された。フランス全土の市町村で外国人と反革命容疑者の活動を監視することを任務としていたが、容疑者の範囲は委員会の判断に委ねられていた。

さらに三月から四月に、前線で革命の勝利を準備しパリに対して抵抗したり反乱を起こしている地方を殲滅するために、国民公会によって全権を持つ議員が派遣された。この派遣議員は集団処刑を行う即決裁判はもちろん、パリ革命裁判所にならって地方革命裁判所ないし軍事法廷を設置する全権を与えられていた。このパリの革命的独裁の強力な制度は、パリ地区の政治憲兵隊として九三年秋に創設された、サン＝キュロットの活動家からなる「革命軍」とともに革命の敵を殲滅する恐怖政治を推進した。

派遣議員制度はフランス革命の重要なテロル装置の一つであった。地方に派遣された議員たちのうち、もつとも有名なのはリヨンに派遣されたフーシェとナントに行ったカリエである。革命軍は「特別裁判」において、満杯になつた監獄を「清掃」するために、裁判を省略してすぐ死刑を執行した。ギロチンでは間に合わないのです、リヨンでは一斉射撃で代替され、ナントでは水刑に置き換えられた。カリエは、何度も百人から数十人の「非宣誓神父」を船底の穴からロワール川に沈めた。ユーモアを交えて彼は、「死刑執行」は「垂直方向での強制収容形式」で行われたと国民公会に報告した、という。二十数回にわたる溺死刑という「ある種の新しい出来事」のほか、子どもを含む大量処刑、横領、婦女子・子どもに対する凌辱、街頭での刺殺、虐殺、飢餓などの「恐怖の極限」が、テルミドールの反動後の国民公会の審理と革命裁判所での裁判で明らかにされた。

カリエの場合、テロルは革命のイデオロギーの言説によって支えられていた。「フランス革命において理性の任務が確立された後では、偏見や迷信、狂信に類したいかなるものも、哲学の光の前に消え去るであろう。」⁽²⁶⁾このようなイデオロギーを推進力として反革命を殲滅する派遣議員カリエの権力は無制約であった。さらに彼の権力は、市、郡、県の行政組織のほかに、創設されたばかりのナントの革命委員会とその武装部隊（「マラー部隊」）、革命裁判所と軍事委員会によって支えられた。

カリエの任務はヴァンデ問題の最終的解決であった。治安部隊によって村人を襲撃し、一か所に集めて女子供を含めて殺戮した。その際、収容所なき殺戮であるが、二〇世紀のアウシュヴィッツでおこなわれたごとく、金目のものを差し出させて山積みにした。リオンのフーシェも、ナチスと同様の思考様式で、二〇万人の街を炭坑の要領で区画ごとに爆破し人口の十分の一を皆殺しにすることを計画した。彼もまた、革命の原理の名のもとに処刑した。「人間の権利」と「人間性の名誉」、そして「祖国の安寧」の回復という崇高な任務のためにテロルを実行したという。彼らは「テルミドールの反動」の後、パリの革命裁判所を率いてきたフーキエリタンヴィルのごとく、共和国の合法的な政府の命令を実行したに過ぎないと反論した。

彼らが求めたのは、「八月一〇日」の偉大な日々のように、人民と権力が直接つながった同盟であった。テロルは、「人民の自由」のために貴族や宣誓拒否僧を除去するための正しい方法であった。その際、革命と戦争で疲弊して共和国を批判する者も「悪しき人民」として聖なるテロルの犠牲になった。平等の共和国を建設するためにはテロリストたちは国家権力に対する信仰を抱いてきた。²⁷⁾

九三年四月六日、軍事・外交・内政全般に強力な権限を持つ公安委員会が設置された。さらに七月から九月にかけて公安委員が刷新され、バレール、ランデ、七月一〇日改選のサン・ジュスト、クートンら五人、同二七日改選のロベスピエール、八月改選のカルノー、ブリュール・ド・ラ・コート・ドール、九月改選のビヨ・ヴァレンヌ、コロ・デルボワらからなる「十二人の独裁者」が事実上の政府となった（大公安委員会）。「十二月四日の法令」によって、「国民公会は、政府の政策が発動される唯一の中心である」と宣言された。外交・軍事・行政を担当する公安委員会と治安維持を担当する保安委員会がその中心であった。強力な中央集権のジャコバン独裁体制が成立し

た。地方行政組織も公安委員会の監督下に置かれた。

九三年五月四日には、穀物とパンに関する最高価格を設定する「最高価格法」が可決され、経済的自由主義が放棄された。さらに同年九月二九日には生活必需品の価格と賃金の上限を定める「総最高価格法」が制定された。必需品の価格は九〇年の三割高、賃金は同年の一・五倍とされ、違反者は反革命容疑者として逮捕された。

革命政府はジロンド派の追放を起点として整備されていった。一七九三年六月、ジロンド派とジャコバン派の抗争に決着をつけたのは民衆であった。民衆は、王制を打倒した一七九二年の「八月一〇日の革命」以降、政治の表舞台に登場してきた。とりわけ、正規のパリ市議会に取って代わった反乱市議会（パリ・コミューン）は民衆運動の成長とともに国会に対抗する政治勢力となっていた。ジャコバン派が国民公会の多数を占める。ジロンド派を追いつめ、追放するのに成功したのは、民衆の街頭での実力を後盾にしたからであった。

五月三十一日、民衆は食糧危機に不満を募らせ、買占めと投機で暴利をむさぼる悪徳商人を取り締まる価格統制を要求し、祖国の危機に立ち上るべく武装蜂起した。国民公会の多数を占めるジロンド派は「経済活動の自由」という自由主義の原則に従って食糧等の価格統制に反対したが、ロベスピエールは、「八月一〇日の革命」によって議会と対抗する勢力に成長した民衆の側に立った——「権利の中でも第一の権利は、生存する権利である。それゆえに、社会の第一の法は社会のすべての構成員に生存する手段を保障する法である」と。六月二日、大砲六〇門で武装した八万人の民衆が公会を包囲するなか、ジロンド派議員二九名の追放が決議された。追放された議員の半数は地方に逃れたが、ブリッソらパリに残った議員とその後逮捕された議員二十一名は革命裁判所に回され処刑された（一〇月）。

この「六月二日の革命」によってジロンド派を追放したジャコバン派は、危機に立つ革命と共和国の防衛のため

に、革命政府を形成していった。ジャコバン革命政府は、国内の「反革命勢力」と闘いつつ対外戦争にも勝利しなければならぬという難しい舵取りを強いられた。そのためには、民衆運動を権力の後ろ盾にしながら、同時に民衆運動を統制しなければならなかった。

革命政府の形成は、同時に独裁体制と恐怖政治の展開でもあった。この革命政治＝恐怖政治の中心となる公安委員会はすでに四月六日に設置されたが、七月にロベスピエールがメンバーになり、さらに八月九月にカルノーらが加わり、十二人の「太公安委員会」に改編された。

八月二十三日、「永久徵募令」（国民総動員令）が発せられた。一八歳から二五歳までの独身男子を徴兵（二〇〇万）するというものである。その他（既婚男子・女子・老人）は後方で戦争の仕事に従事すべしとされた。平原派の公安委員バレールは、〈祖国のために死ぬこと〉を求める革命的な動員の意味を次のように表現した。「このときから敵が共和国の領土から追い出されてしまうまで、フランス人はすべて無期限の軍役に徴用される。若者は戦いにおもむき、結婚している男子は武器を作り糧食を運ぶ。女性はテントや衣服を作り、病院で働く。子どもは古衣を切って包帯をつくり、老人は広場に行き、戦士の士気を高め、国王たちへの憎しみと共和国の統一を説く。」

恐怖政治の諸制度は、九四年六月一〇日の「プレリアル法」によってさらに強化された。シャン・ド＝マルス広場で行われた最高存在の祭典の二日後である。この法律は、反革命容疑者の範囲を拡大するとともに弁護士や証人を廃止した。起訴の権限をもつのは「公会または両委員会」とされた。公安委員会と保安委員会は公会の決議なしで起訴できるということは、公会そのものさえ起訴できるということを意味した。判決は死刑か無罪のみとして、裁判手続きの簡素化と迅速化が図られた。「人民の敵」を「恐怖」によってすみやかに、取り逃すことなく抹殺する試みであった。恐怖政治の時期に約五〇万人が反革命容疑者として収監され、死亡者総数は裁判なしの処刑を含め

て三万五、〇〇〇人から四万人と見積もられている。²⁹⁾

恐怖政治は、一般に革命の危機（内戦）と祖国の危機（戦争）に直面して、内部の敵（反革命勢力）と外部の敵（外国軍）と戦うためのやむを得ざる措置であつたと解釈され、正当化されてきた。だがフランソワ・フユレやモナ・オズーフらが指摘するように、恐怖政治は内戦の鎮圧後に拡大し猛威を振るつた。革命が最も危機的な状況を迎えたのは九三年夏のはじめであつたが、恐怖政治は一〇月から始まる再建と勝利とともに激化し、その冬に敗北したりヨンとヴァンデで最高潮に達した。派遣議員によるテロルもそうであつた。恐怖政治を祖国愛に発した忠誠のせいにするのが一般的だが、実際は、大規模な恐怖政治はいたるところで戦勝の後に行われた。それゆえ、テロルが戦争の勝利をもたらしたといふのは論理的矛盾である。また、フユレによれば、恐怖政治は教養あるブルジョアジーとは別の社会層、サン・キユロットの活動家の供給源である都市下層民衆の心性によるという解釈も疑わしい。恐怖政治の言説は革命のほとんどすべての指導者が口にしていたのであり、その狂信がモンターニュ派議員全体を支配していたからである。

フユレとオズーフによれば、恐怖政治は、「絶対的で不可分の共和国」、「一体である人民」の主権というフランス革命の文化に深くかかわっている。まず第一にあげるべきは、人間の再生という思想である。これによってフランス革命は世俗化された様式で行われる一種の宗教的告知に似通つたものになる。³⁰⁾ この思想によれば、自由な市民の共和国がまだ実現しないのは過去の歴史によって墮落させられた人間のせいであり、革命によって新しい人間を作り上げなければならなかつた。そのためには、「すべてが許される」のである。

もう一つは、政治がすべてを可能にするという思想である。ヘーゲル『精神現象学』の「絶対的自由とテロル」

章)が洞察したように、フランス革命は近代の意志論が純粹な形で展開する舞台であった。この主意主義に導かれて、革命の指導者たちは、かつて神が独占していた人間の世界を創造し直すという権利を取り戻すことが可能となり、この企てをさまざまの障害があるとすれば、それは邪悪な意志のせいだと主張した。恐怖政治によってそれを取り除かなければならない。「すべては可能」なのである。

第三は、フランス革命が人民を王の地位につけたことである。「絶対的で不可分の共和国」という観念は、ルソンの一般意思の不可謬・不可分割・不可譲渡性のように、人民主権の正統性という強迫観念を糧とし、諸権力を相互に制限するという機構を作るとを妨げた。恐怖政治は、あらゆる分派の陰謀や特権やエゴイズムなど一体としての聖なる人民を墮落させるものを除去しなければならない。そのためには、「すべてのことを行わなければならない」のである。

政治の革命と「人間の再生」という思想に関わることであるが、最初の革命的宗教はキリスト教的宗教であった。連盟祭は宗教的熱情と革命的熱情の同盟を体现していた。儀式は宗教と自由の一致を祝い、教会はキリスト教の教えと祖国愛の調和という思想を民衆に広めるために努力を払った。そこでは革命と福音書の血縁関係が強調された。「神の子たちの聖なる平等」が称揚された。³¹⁾ 革命とキリスト教の結びつきは、最初に聖職者民事基本法の衝撃によって打ち碎かれ、一七九二年「八月一〇日の革命」のあと、出生、洗礼、死亡の登録に関する混乱に基づいて立法議會が戸籍を世俗化し、離婚を合法化したとき最終的に否定された。革命とキリスト教、宗教と祖国愛の離婚が完成した。

キリスト教にとって代わる新しい信仰が求められた。革命的信仰の最初の試みが「理性の信仰」であった。一七九三年十一月八日、「理性の崇拜」の祭典が行われた。雑多な要素——理性への教会堂の献納、僧侶の棄教、自由

の殉教者の崇拜、非キリスト教化の異様な行進が持ち込まれた。この「理性が十八世紀の偏見に対しておさめた勝利」を祝う祭典は、「自由の女神」が「理性」に火をともし、闇と怪物を追い払い、狂信に勝利するという筋書きで行われた。この「理性の信仰」と名付けられた見世物(スペクタクル)には〈信仰〉の観念はなかった。花形女優が演じる女神はあくまで演劇的存在であって神性はなく、いかなる祈りも捧げられることはなかった。これはまた〈理性〉の信仰でさえなかった。祝福された理性は自由であったり、自然であったり、勝利であるという具合になんの原理もなかった。またこの祭典には習俗の祭典や美德の祭典など、論理的に矛盾する名前さえ付けられた。⁽³²⁾

「最高存在の崇拜」は一転して無神論を開放しようとした。一七九三年五月七日、国民公会はロベスピエールの提案に基づき、「フランス人は最高存在と靈魂不滅を認める決議」を採択していた。その一か月後、最高存在の祭典が行われた。ロベスピエールの信念と結びつけられるこの新しい理神論的信仰の儀式には、信仰というものもつあらゆる外観があった。民衆は賛歌を歌い、最高存在に感謝の祈りを捧げて行進した。ロベスピエールはこの信仰に、宗教的、道徳的観念の秩序づけという目的を付与した。彼にとっては、道徳を永遠の基礎に結びつけ、共和政を完成させることが問題であった。アルベール・マチエは、ロベスピエールが求めたものについて、次のように述べている。

「彼は、カトリシズムが廃止された代わりに市民の教説で十分だとは考えていなかった。彼にとつて政治的観点よりも、道徳的観点や社会的観点のほうが重要だったからである。カトリシズムは完璧な支配システムであり、主従関係を生み出す見事な道具であると同時に一つの生活規範であり、道徳であった。だからロベスピエールは、市民宗教にも独自の道徳と生活規範が必要であり、道徳を魂の不滅と神の存在という二つの社会的教義に立脚さ

せることができれば、その要件を満たすことができると考えた。³³⁾」

ロベスピエールにとって政治学は道徳の一部門、道徳の実践形態であった。「市民社会の唯一の土台、それは道徳である。(…) 背徳が専制の温床であり、徳が共和国の本質だということである。³⁴⁾」こうしてロベスピエールは、革命の危機はすべて専制権力の陰謀の手先によっておこされたと論じてゆく。「憲法を盾にとって王権の立て直しを図った」ラファイエット、同じく「国民公会を敵に回してジロンド派を擁護した」デムーリエ、憲法を「王権への攻撃を回避するための盾」に利用したブリッソ、「人民主権の宣言と引き換えに国民公会の首を締め上げて共和国政府を窒息させた」エベールとその一味……。反革命派から革命派に至るまで、敵は同心円大に広がっていく。³⁵⁾

だが、この新しい信仰と公民的儀式には、恐怖政治を正当化するというもう一つの要請が結びついていた。一七九四年六月八日のシャンド＝マルス広場での祭典の二日後に、恐怖政治をさらに推し進める「フロリアル法」が制定された。この時間的一致には、国家宗教の確立と恐怖政治の推進との両立という論理的関連づけが対応していた。「正義の不変の基礎」の上に「公共の道徳」をよみがえらせることと、「罪ある者」と「敵」に鉄槌を下すことの両立である。ロベスピエールは、この両立によって、恐怖政治の実行者は現世における血なまぐさい行為に対する来世の許しを保障され、恐怖に耐えることができることを期待した。³⁶⁾

ロベスピエールのテロルには絶対的純粋性、つまり美德という観念が表裏一体として存在していた。この権力と道徳によって純化されるべきものは、本来は純粋で力を備えていたもの、すなわち人民であった。不純物が入り混じり、腐敗してした人民を目覚めさせ、そのことによって再生させなければならない。人民の浄化のためには恐怖政治を日常化しなければならない。その外科手術によって、汚れた血を取り去って新しい血を注入し、健康な人間

へと再生させるのである。⁽³⁷⁾

「ジャコバン憲法」(九三年六月二十四日採択、八月一〇日の国民投票で成立、施行棚上げ)は、「人民をその憲法に一致させる」ことをめざした。そのためには国家・社会だけではなく人間性をも作り変える必要があった。祭典と儀礼の開催、シンボル(政治象徴)の改造、マス・プロパガンダ、下層階級の政治的動員(スベクタクル政治)、日常生活の学校化と政治化などあらゆることを利用しようとした。テロルもその重要な手段であった。反革命派を殲滅し、革命の邪悪な指導者を肅清し、道を過つた人民を目覚めさせるのに不可欠であった。ミシユレがいうように、「理念的には徹底した民主政、現実的には強力な独裁、それがクートン、サンジユスト、したがってロベスピエールの処方箋だった」のである。⁽³⁸⁾

モナ・オズーフは、革命の進展と急進化にともない、当初の国家の再生やフランスの再生に代わって政治的、道徳的で社会的な「新しい人民」の創造という意味での再生が語られるようになったという。新しい人民の創出は夢ではあったが、たとえば、共和歴という新しい時間、諸県からなる新しい空間、新しくつけ直された地名、新しい学校、祭典、ひいては俺々おまえで呼び合うことや帽章の着用まで「無数の制度や創設物」が、それをめざした。急進的共和派は、再生をさまざまげる外的障害と内的障害を排除しようとした。革命の敵とされた聖職者や貴族、遅れた農民、迷信を信じる老婆たちを無力化し、軽薄な見世物を禁止し、賭け事を根絶し、隠語を消滅させ、図書を一掃するといった具合である。無力化と排除が暴力を伴うことも珍しくはなかった。この否定の段階のあと、再生した人民を包む積極的な網の目が張り巡らされなければならなかった。広場や通りの名前、新しい記念物、新しい服装や振る舞い、儀礼や信仰、新しい学校などである。旧体制の習慣で固まった大人の再生には儀礼と祭典の体系を考案しなければならなかったが、生まれたばかりの世代である子どもには悪しき過去のないユートピア的環境を

用意しなければならぬ。ロベスピエールは、ジロンド派の没落後、コンドルセの自由主義的教育改革案に代わって新しい教育案（暗殺された共和主義の殉教者ル・ペルティエ議員の案）を提出した。彼の考えた再生の二つの手段は、無垢の存在を家族と社会の悪習から隔離するための厳格に閉ざされた寄宿舎制度と、訓練も余暇も服装も食事も睡眠さえ偶然に任せることを禁じた時間割であった。この厳格な規則による新しい人間の創造をめざしたこの案は国民公会によって採択された。しかし、寄宿舎制度に対しては「自然の強力な叫び」である家族感情から異論が唱えられ、厳格な時間割は、反知性主義と学校に不信を抱く議会左翼によって批判された。人民は、新しい人間を生み出す教育形態を革命そのもののなかに見出したのであり、民衆協会という人民の学校のなかで革命的实践を通じて自己を確立するのだという主張である。（巻末の資料4「共和政におけるユートピア政治」人間の再生」

参照⁽³⁹⁾)

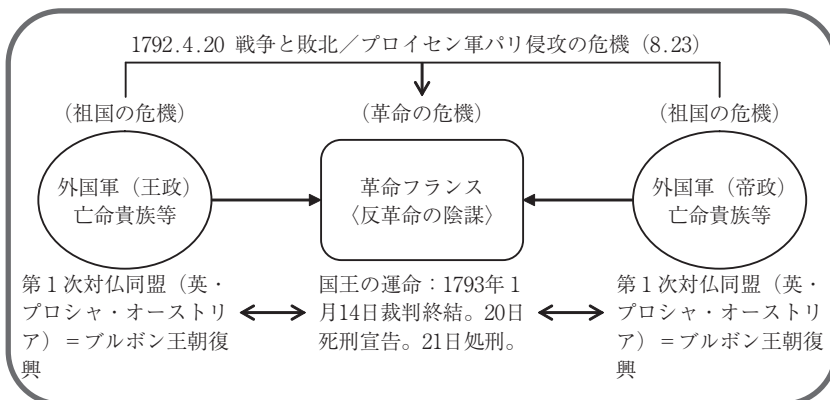
ロベスピエールは九四年二月五日の報告（共和国の内政において国民公会を導くべき政治的モラルの原理について）で、「徳」と恐怖の論理を展開した。「いまや共和国の内外の敵を撃退するか、共和国とともに倒れるかという危急存亡のときである。このような状況においては諸君の政治の第一の格率は、人民を理性によって導き、人民の敵をテロルによって導くことではない。平和時における人民的な政府の原動力が徳であるとすれば、革命時における人民的な政府の原動力は徳とテロルである。徳なきテロルは災厄を生み、テロルなき徳は無力である。」ロベスピエール派によれば、共和政は「徳」＋「テロル」であり、テロルは人民教育の重要な手段であった。⁽⁴⁰⁾

フランソワ・フユレはその卓抜な論文において、ロベスピエールの徳とテロルの論理を次のように述べている。

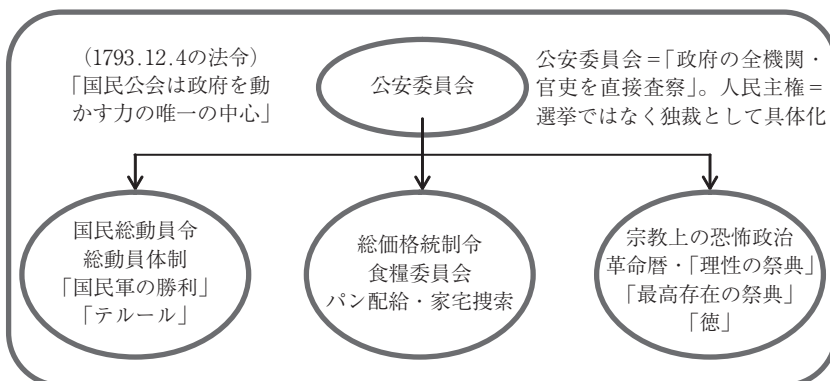
「恐怖政治は畏怖の政治なのに、ロベスピエールはそれを徳の政治として理論化した。貴族階級を絶滅するために生まれたのだが、恐怖政治は悪人の数を減らし犯罪を抑圧する手段へと形を変えた。以後、恐怖政治は革命と重なり合う意味の広がりをもち、革命と不可分なものになった。ただ恐怖政治だけがいつの日か市民の共和国を生み出すことを可能にしたからである。(……) 自由な市民の共和国が今なお可能になっていないのは、人間が過去の歴史によって墮落させられ、悪人になっているからに他ならない。革命というこの前代未聞の真新しい歴史は、恐怖政治によってのみ新しい人間を作り出すであろう。」⁴¹

われわれは改めて、革命政治はテロル政治であり、テロル政治は有徳の人民を創造するのに不可欠であったことを確認する必要がある。

(資料1) 革命の危機と祖国の危機



(資料2) テルール (恐怖政治)



(資料3) 恐怖政治の深化

革命裁判の中央集権化：県の革命裁判所廃止。すべてパリの革命裁判所へ。
 革命裁判の能率化：弁護と予備審問の廃止。陪審員は心証のみで判決。
 恐怖政治の能率化：保安委員会の権限をさいて、公安委員会直属の「一般警察局」創設。
 革命の敵の拡大：「問題は彼らを罰することではなく絶滅することである」
 革命独裁の正当化：「人民の救済という聖なる法」に基づく／「その規範は正義と公共の秩序に由来」／「政府は徳性に導かれる」（「徳性とは個別利害を一般利害に合致させること」）

(資料4)

〈共和政におけるユートピア政治＝人間の再生〉

□フランス革命：自由・平等な個人（市民）の結合にもとづく新しい国民共同体の創出。アンシャン・レジームや貴族社会、絶対王政やカトリシズムにかかわる言葉やシンボルの拒否（ルイ16世の公開処刑は王政や国王の身体に関わるシンボルを目に見えるかたちで除去するため）→自由、平等、国民、法、再生、祖国といった言葉を神聖視＋その理念を表現する政治的シンボルや儀礼を創造。

□法における革命に対応する「心の習慣」の革命の必要性：〈心性 *mentalité*〉〈心の習慣 *moeurs*〉における革命⇒〈人間の再生〉（精神〔読み書き計算〕と心〔道徳〕と肉体から構成される人間全体の掌握と再生。

(1) 教育

- 1) カトリック教会施設での教育の禁止（1792年8月までにすべて実施）
- 2) コンドルセの自由主義教育案（92年4月初等学校におけるイデオロギー教育の否定）を否定してブキエ案を可決（93年7月）：初等教育だけでなく、政治集会や演劇や国民祭典を「公教育」の一環とし、教育対象を子どもから大人にまで拡大。（ロベスピエールが支持したルベルチェ案＝5歳～12歳の子どもを国民学寮に入れて、国家管理による道徳教育を行い、共和国に相応しい人間に成型する案は採択されず。）

(2) シンボルと儀礼

社会空間・日常生活空間全体が「心の習慣」の学校と考えられ、時間と空間の再組織化が試みられた。

- 1) キリスト教と結びついたグレゴリウス暦を廃止して共和暦（革命暦）を採用（1793.10.5）：10進法により1週10日、1ヶ月30日。月の名称も秋から葡萄月、霧月、霜月、雪月、雨月、風月……。曜日の名称も第1日（プリミディ）、第2日（デュオディ）……第10日（デカディ）。安息日は廃止、第10日が休日。
- 2) 広場、道路、市町村の名称変更：「ルイ15世広場」は「革命広場」に、「聖母（ノート）マリア（ルダム）大聖堂」は「理性の神殿」に。
- 3) 革命家は名前も変更、子どもにも革命的な名前：「ル・ロワ（王）」「レヴェック（司教）」を「ラ・ロワ（法）」や「自由（リベルテ）」に……。トランプのキングは「自由」、クイーンは「平等」、ジャックは「友愛」に。
- 4) 方言の撲滅とフランス語統一：新聞、回状、クラブ、人民協会、学校、軍隊すべてを動員。
- 5) 政治的シンボルや儀礼：三色の帽章、自由の木、自由の女神、印章、貨幣、衣服、家具、陶磁器、祭典＝これらはすべて「心の習慣」と人間の再生に寄与するものと考えられた。
自由、平等、人権などの抽象的理念・価値はシンボルやアレゴリーによって視覚化され、祭典や儀礼で民衆を巻き込んだ。

〈共和政におけるユートピア政治＝人間の再生〉(続)

(*) 革命家は、こうした試みによって根本的な変化がもたらされると考えた。教育→農業・工業生産物の増加、農村の貧困の絶滅、道徳と公衆衛生→病人の減少……。それによって、再生された幸福なフランス人が満ち溢れると。

(3) 非キリスト教化運動

- 1) 革命初期の教会財産没収、10分の1税の廃止、修道院廃止、聖職者民事基本法施行による反教権主義。既成宗教否定の動きが、共和暦導入のあと93年秋から94年春にかけて活発化し、「非キリスト教化運動」が激発。
- 2) 派遣議員と革命軍による激しい反キリスト教キャンペーン
- 3) ノートルダム大聖堂の正面玄関の国王たちの彫像の除去
- 4) 街路名から「聖(サン)」という言葉を除去
- 5) 聖職者の衣服の着用禁止
- 6) オペラ座の女優が「自由と理性の女神」に扮しノートルダム大聖堂で「理性の祭典」
- 7) 聖職者の聖職放棄と妻帯(2万人放棄、6000人が結婚)
- 8) 教会を閉鎖して「理性の神殿」
- 9) 礼拝禁止
- 10) 聖像・聖画・聖具の略奪・破壊
- 11) 聖杯で酒を飲む
- 12) カーニバル的宴会

- (4) 「最高存在の祭典」(94.6.8): 「たとえ神の存在とか、靈魂の不滅といったものが、たんなる夢でしかなくとも、それらはやはり人間精神の思いついたあらゆるものの中で、最も美しいものであろう。」なぜなら、これらの観念は「正義へのたえざる訴えであり、したがって、それは社会的、共和的であるからだ。」この二つの観念の正しさを確認する祭典を国民公会に提案:

- 1) カトリックに代わるものをつくろうとした: 「最高存在」とはカトリックの用語で神。
- 2) 連盟祭からの一連の革命祭典の継承。
- 3) 古代ギリシャの祭典の模倣: 「人間とは、自然のうちに存在する最も偉大な対象物(オブジェ)である。そして、あらゆる光景(スペクタクル)のうちで最も壮大なもの、それは集会した一大人民の光景である。」見物する大観衆そのものが同時に一つのスペクタクルと化する。人民は見物し、見物される。「国民祭典の方式はいうまでもなく、人民の最も優しい友愛の絆であると同時に、最も強力なよみがえりの手段であらう。」

注

- (1) ヴィクトル・ザスラフスキー、根岸隆夫訳「カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺」みずす書房、二〇一〇年、六頁。
 - (2) M. Mann, *The Dark Side of Democracy: Explaining Ethnic Cleansing*, Cambridge University Press, 2004, p. 17.
 - (3) ヴィクトル・ザスラフスキー、前掲書「カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺」第三章参照。
 - (4) B. Harf & T. Gurr, "Toward an Empirical Theory of Genocides and Politicides: Identification and Measurement of Cases since 1945," in *International Studies Quarterly*, 1988, p. 360.
 - (5) 前掲書「カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺」五九頁。
 - (6) ソ連崩壊後の新しい資料に基づく研究によれば、犠牲者の大部分はポーランド陸軍将校であったが、他に知識人、大学教授、学校教師、実業家、幹部公務員、地主、警察官、国境警備隊員、神父たちがいた。彼らは、ソ連が独ソ不可侵協定（モロトフ＝リッペントロフ協定）に基づいて分割された東部ポーランドを占領した際に捕らえられた。それは、ソ連秘密警察が東部ポーランドで行っていた「反ソ社会的異質分子」、「客観的に異質な階級」に属する人物に対する告発に依拠していた。ポーランド将校と市民に対する民族浄化の虐殺は、ソ連占領地域で実行された「階級浄化」の過程の一部だったのである。
- ザスラフスキーは、一九四〇年四月と五月に二万五、〇〇〇人以上のポーランド市民がソ連内務人民委員部（NKVD）によって銃殺された「カチンの虐殺」（その大部分は陸軍将校であったが、他に知識人、実業家、幹部公務員、警察官、国境警備隊員、神父もいた）、また独ソ不可侵条約に従ってソ連が占領した全地域、ポーランド、バルト諸国、ベッサラビア、北ブコヴィナの住民に対する大規模弾圧、さらには大粛清時代にポーランド出身で国境地帯に居住していたソ連市民一四万四、〇〇〇人を逮捕し、うち十一万一、〇〇〇人を銃殺した事件などを考察する鍵概念として、この「階級浄化」と「民族浄化」を用いている。参照「カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺」五八頁。
- (7) この「公式見解」全文は、前掲書「カチンの森」九二―九七頁。西側政府は「カチンの大量虐殺」に関するソ連の事実の隠蔽・歪曲・捏造を積極的に帮助した。戦争目的のためであり、世論指導者や有力紙がソ連と深く連帯していたためであった。戦後、モスクワの指導者はニューヨークベルク裁判で、カチン虐殺をドイツの犯罪であると立証するべく執拗な努力を払った。モスクワで、大粛清期に古参ボルシェヴィキを糾弾したビシンスキーを委員長としてニューヨーク裁判組織委員会が設立された。偽造工作に参加することを拒否したソ連法律顧問ニコライ・ゾーリヤは暗殺され、カチンの司法解剖に参加した国際医学調査委員会（ナヴィール委員会）の二人の専門家（ブラハ大学のハイエク教授とソフィア大学のマルコフ教授）は逮捕され、ドイツに

脅されて署名を強いられたとして報告書を否定した。

連合国政府も戦勝国政府も虐殺がソ連によって行われた事実を封印した。逆に、四十四年から五一年まで、アメリカ国務省とホワイトハウスは真相が公になるのを全力で防ごうとした。この共犯関係と無関心の風土において、ソ連秘密機関は、各国共産党を使って国際キャンペーンを展開し、国際医学調査委員会の委員たちの信用を失墜させようとした。スイス共産党はナヴィール教授を「ナチ協力者」と非難し、大学から追放しようとしたが、スイス政府は拒否した。ナポリ大学のパルミエリ教授の運命はより苛酷であった。何年もイタリヤ共産党に監視され強迫された。学生からは「ナチ協力者」、「歴史的真相の偽造者」として迫害され、教授会は教授職を剥奪しよう提案した。教授はカチン事件の報告書と写真を密閉防水して自分の地所に埋め、さらに一九六八年まで自宅の火事の際に消失したという噂を流して資料を守った。

朝鮮戦争でアメリカ兵捕虜の待遇が問題とされているとき、アメリカ議会はカチン問題特別委員会を設置し、「ソ連内務人民委員部（NKVD）による虐殺」であるという結論を出した。しかしこの結論は、冷戦中、欧州の世論と多くの歴史研究者に共有されることはなかった。たとえばイギリス政府は、アメリカの結論を公式に認めないことを決定さえした。

ソ連では、スターリンの犯罪を糾弾したフルシチョフの秘密報告においても、それ以後も、「ナチ・ドイツ侵略者によるカチンの森でのポーランド人戦争捕虜将校銃殺の状況を確認し調査する特別委員会」と称する組織の公式見解を守り続けるために偽装工作を続けた。この委員会によれば、抹殺されたすべてのポーランド人はドイツ占領軍によって銃殺されたのであり、この結論は広く国際世論に根付いている。この結論に従って、国家保安省（KGB）議長シュレーピンは、総計二万一、八五七件の個人ファイルの破棄をフルシチョフに求め許可された。こうして政治局はカチン虐殺に関するすべての文書を、ソ連内務人民委員部（NKVD）新版議事録を除いて破棄した。参照、『カチンの森 ポーランド指導階級の抹殺』第四一六章。

(8) 『The Prevention of Literature', *Polemic*, No. 2, Jan. 1946, in *The Collected Essays, Journalism & Letters of George Orwell*, Secker & Warburg, 1969. (川端康雄編) 『オーウェル評論集2 水晶の精神』平凡社、八二一―八三頁。

(9) D. Mclellan, *Ideology*, Open University Press, 1989. (千葉真・木部尚志訳『イデオロギー』昭和堂、一九九二年、第一章。)

(10) バジル・ウィリー (三田博雄・松本啓・森松健介訳) 『十八世紀の自然思想』みすず書房、一九七五年、E・カッシーラ (中野好之訳) 『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、新装復刻版一九九七年、J・H・ブラムフィット (清水幾太郎訳) 『フランス啓蒙思想入門』白水社、新装版二〇〇四年、等参照。

(11) テリー・イーグルトン (大橋洋一訳) 『イデオロギーとは何か』平凡社、一九九九年、一五〇頁。

- (12) カール・マンハイム (徳永恂訳) 『イデオロギーとユートピア』中央公論社、「世界の名著」。
- (13) ヤーコブ・パリオ (徳永恂訳) 『イデオロギーとは何か』講談社、一九七四年、一〇三頁。
- (14) 私はすでに、こうしたイデオロギーを人間の救済欲求に基づく世俗化された宗教と規定した。小沼堅司「イデオロギーとテロル」——共産主義的全体主義独裁制における恐怖と狂気のシンフォニー』『法学論集』第百十七号 (二〇一三年三月)、小沼堅司「ユートピアの鎖——全体主義の歴史経緯——」成文社、二〇〇三年、参照。
- (15) フランソワ・フユレ (大津真作訳) 『フランス革命を考える』岩波書店、一九八九年、一〇一頁。
- (16) 同、二十一頁。J・L・タルモンは、いち早くスターリン批判とハンガリー動乱を受けてマルクス主義的全体主義における「政治的メシア主義」を解剖したが、その起源をフランス革命のジャコバン主義の伝統に求めていた。J・L・Talmon, *The Origins of Totalitarian Democracy*, Frederick A. Praeger, 1960, Section 4 "Secular Messianism and Religious Messianism". フランス革命にかんするマルクス主義者の解釈に対する批判はフランソワ・フユレの前掲書を嚆矢とする。また、フランソワ・フユレ (今村仁司、今村真介訳) 『マルクスとフランス革命』法政大学出版局、二〇〇八年、同 (楠瀬正浩訳) 『幻想の過去 全体主義の二〇世紀』第一章「革命の情熱」basilico、二〇〇七年を参照。
- Cf. Ferenc Feher, *The Frozen Revolution: An Essay on Jacobinism*, Cambridge University Press, 1987; Lynn Hunt, *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*, University of California Press, 1984. (松浦義弘訳『フランス革命の政治文化』平凡社、一九八九年。)
- (17) フユレ、前掲書「幻想の過去 全体主義の二〇世紀」二十三頁。
- (18) ステファヌ・クルトワ「なぜだったのか?」『共産主義黒書 コミンテルン・アジア篇』、恵雅堂出版、二〇〇六年、三四五頁。
- (19) Karl Kautsky, *Marxism and Bolshevism: Democracy and Dictatorship*, in J. Shaplen and D. Shub (ed.), *Socialism, Fascism, Communism*, New York, 1934, Kautsky Internet Archive.
- (20) ステファヌ・クルトワ「なぜだったのか?」前掲書「共産主義黒書 コミンテルン・アジア篇」三五二頁。
- (21) Mikhail Heller, *Cogs in the Wheel: The Formation of Soviet Man*, Alfred A. Knopf, Inc. New York 1988, pp. 1-28. (邦訳) 辻由美訳『ホモ・ソビエティクス——機械と歯車』白水社、一九八八年。Cf. Mikhail Heller and Aleksandr Nekrich, *Utopia in Power: The History of the Soviet Union from 1917 to the Present*, translated by Phyllis B. Carlos, Summit Books, New York, 1986.

- (22) ローラン・デスポ(村澤真保呂・信友建志訳)『テロル機械』現代思潮新社、二〇〇二年。
- (23) ルノートル／カストロ(山本有幸編訳)『物語フランス革命史Ⅱ 血に渴く神々』白水社、一九二頁。安達正勝『物語フランス革命』中央公論社、二〇〇八年、参照。
- (24) フランソワ・フユレ、モナ・オズーフ編(河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳)『フランス革命事典4 制度』みすず書房、一九九九年、一八九頁。
- (25) 同一九三頁。
- (26) 前掲書『テロル機械』十八頁。
- (27) ルノートル／カストロ(山本有幸編訳)『物語フランス革命史Ⅲ 悪夢と贖罪』白水社、七三四頁、一九三二〇六頁。ステファン・ツヴァイク全集十一卷『ジヨゼフ・フーシエ』(吉田正巳・小野寺和夫・飯塚信夫訳)みすず書房、参照。
- (28) 前掲書『フランス革命事典4 制度』一九〇頁。
- (29) ミシユレ(桑原武夫、多田道太郎、樋口謹一訳)『フランス革命史』(中央公論社『世界の名著』48巻、一九七九年)四四八頁。フランク・フェイヘアも、革命法廷や軍事委員会、派遣議員の命令による無差別虐殺による恐怖政治期の犠牲者を約四万人と見積もっている。それに加えて反革命容疑者として収監されていた約四〇万人のかかりの人々が処刑された。Franc Fehrer, *The Frozen Revolution: An Essay on Jacobinism*, Cambridge University Press, 1987, p. 111.
- (30) 前掲書『フランス革命事典1 事件』所収『恐怖政治』一二二頁。
- (31) 前掲書『フランス革命事典4 制度』所収『革命的宗教』四七頁。
- (32) ミシユレ『フランス革命史』三九九〜四〇〇頁。前掲書『フランス革命事典』五〇一〜五一頁。
- (33) アルベール・マチエ(杉本隆司訳)『革命宗教の起源』所収『ロベスピエールと最高存在の崇拜』白水社、二〇一二年、二〇四頁。
- (34) 同、一九九頁。
- (35) マチエ、前掲書『革命宗教の起源』、一九九頁。河野健二編『資料フランス革命』所収『ロベスピエールの演説 最高存在の崇拜について』岩波書店、一九八九年、五〇一〜五二三頁。
- (36) 前掲書『フランス革命事典4』五五頁。
- (37) ローラン・デスポ、前掲書『テロル機械』第三部、第四章。ここには、帝政ロシアにおけるネチャーエフ事件のトカチェフ

(二十五歳以上の者は皆殺しにしてしまえ)、カンボジアのボル・ポト(組織オンカー)、毛沢東(プロレタリアートの血を新たに流し込め)「汚れた血は捨ててしまえ」と同じ恐怖政治の論理がある。

(38) ミシユレ、前掲書『フランス革命史』三五六頁。モナ・オズーフ(立川孝一訳)『革命祭典 フランス革命における祭りと祭典行列』岩波書店、一九八八年、参照。

(39) 前掲書『フランス革命事典2』所収「再生」みず書房、一九九五年、九七三―九七七頁。

(40) 前掲書『資料フランス革命』所収「ロベスピエールの演説 最高存在の崇拜について」(一七九四年六月八日)、「ロベスピエール 政治道徳の諸原理について」(一七九四年二月五日)。

(41) フェレ「恐怖政治」、前掲書『フランス革命事典1 事件』所収。計量歴史学的手法で、フランス革命の四半世紀における利益と損失の収支決算を解明したルネ・セディオ(山崎耕一訳)『フランス革命の代償』草思社、一九九一年を参照されたい。

ノール賞作家アナトール・フランスは、小説『神々は渴く』(『アナトール・フランス小説集2』水野成夫訳、白水社、二〇〇〇年)で抽象的な(人民の自由)の名のもとで生身の人民を虐殺するテロル政治の惨劇を描いた。心優しき主人公エヴァリス・ガムランは、絶対的正義にとりつかれて反対派を次々にギロチンにかけていく。かれは崇拜の対象をはじめはミラボー、次はマラー、最後はロベスピエールへと、より純粹で過激な指導者に変えていく。正義に飢えた彼は、そのたびにより多くの人民の血を求めてやまない。革命裁判所のガムランの「絶対の探究」を冷やかに見ているのが、彼の母親と副主人公のプロットーである。プロットーのセリフに、「現に革命裁判所を支配しているのは、低級な正義感と凡庸な平等感です」という一説がある。アナトール・フランスは、恐怖政治の外側と内側の人間に、理想政治の愚劣さを語らせて、フランス革命の狂気を浮き彫りにした。ロシア一〇月革命で政治的狂熱が歴史的必然論によって武装されると、理念の使徒は理念の奴隷になる。